

史料が語る女子大学生の活動

—お茶の水女子大学を事例として—

和田華子*

はじめに

近年、日本各地の四年制女子大学の共学化や募集停止が次々に発表されたことにより、女子大学の存在意義が議論を呼んでいる。その議論を行う上では、女子大学の存在意義を検証するための記録、すなわち、女子大学生¹の在学時の経験や、その経験が卒業後、社会にどのように還元されたかを示す記録が必要不可欠である。

そこで本稿では、お茶の水女子大学第25回国際日本学シンポジウム「わたしにお茶大がくれたもの—あなたにとってはなんですか?—」における問題提起を基として、女子大学生の在学時及び卒業後の活動の歴史を語り継ぐことが可能となる、多様な史資料を紹介するとともに、それらを歴史史料として収集・保存・公開することの必要性について提起したい。なお考察にあたっては、主に筆者が芹澤良子・加藤厚子と行った1950年代から70年代にお茶の水女子大学に在籍した卒業生に対するインタビュー及びアンケート調査の成果を用いるとともに、お茶の水女子大学の卒業生に関する史資料を事例としてとりあげる²。

1. 大学史資料の分類と具体例

まず、大学の歴史を知るための史資料、すなわち大学史資料について紹介したい³。著者はかつて、お茶の水女子大学（以下、お茶大）の前身で

ある東京女子高等師範学校（以下、女高師）の卒業生のオーラルヒストリーの収集・保存・公開に携わる過程において、大学史を知る上での大学運営（経営）側が生成した史料の限界性と、学生ないし卒業生の視点から大学史を解明することの重要性を強く認識した⁴。本稿ではまず、大学史資料を「大学運営側の視点による史料」「学生の視点による史料」「その他」に分類した上で、それぞれの史料群の特色と具体例を紹介したい。

「大学運営側の視点による史料」とは、大学の運営を担う教職員が職務において生成した文書や、学内の諸組織（教授会・理事会・評議会等）や大学を管轄する諸官庁等により生成された文書である。大学の行政文書・事務書類・学報・広報誌・沿革史等がこれに該当する。お茶大の場合、行政文書・事務書類の他、学内の人事や学事等の情報が掲載された『お茶の水女子大学学報』や沿革史である『お茶の水女子大学百年史』等が「大学運営側の視点による史料」に含まれる。これらは大学の制度・カリキュラムの形成及び運営を知ることが可能となる、大学史を知る上で支柱の一つとなる史料群であると言えよう⁵。

次に、「学生の視点による史料」とは、学生・卒業生が作成した記録や、学生が所属する団体や同窓会により生成された記録である。その例としては、学生による日記・手記・ノート、学生が主体となって発行される大学新聞（お茶の水女子大の場合は、かつて発行されていた『お茶の水女子大学新聞』）、自治会やサークルで発行された会報・パンフレット・ビラ等が挙げられる。

*2010年 お茶の水女子大学人間文化研究科国際日本学専攻単位取得退学

さらに、卒業生によるオーラルヒストリーや同窓会関連史料等もこの史料群に含まれる。卒業生によるオーラルヒストリーは、インタビューにより、卒業生の記憶を記録化したものである。同窓会関連史料については、同窓会の運営文書・同窓会が発行した会報・広報誌・同窓会の沿革史の他、同窓会各支部が編集した会員による手記集が挙げられる。また、同窓生により個人出版された自伝や回顧録も広義の意味でこれらの史料群に含まれるだろう。手記集や自伝には、学生時代の経験や所感、卒業後の活動について言及されることが多々ある。それらからは、卒業生の在学時の活動を知ることができるだけでなく、卒業生が当時、大学の制度・カリキュラムをどう受け止めていたかを知ることが可能となる。さらに卒業後の活動からは、大学時代の経験がどのように社会に還元されたかがわかるのである。湯川文彦氏は、大学の存在意義は時の経過とともに多くの学生や卒業生の人生と深く結びつくようになってきたこと、また、大学の経営者や教職員のみならず、学生や卒業生も大学を規定する担い手としての存在感を高めてきていることを指摘している⁶。学生や卒業生による個人の経験の記録は大学の歴史を知る上で不可欠な史料群なのである。

その他として、写真や映像資料、制服や教材として使用された標本等のモノ資料、当時の新聞や雑誌に掲載された大学関連の記事等があげられる。

以上の三つの種類の史料群はそれぞれ異なる視点・形態による史料群であると同時に大学の歴史を知る史料群として優劣はなく、相互補完関係にあると言える。例えば、差波亜紀子氏は大学の沿革史について、学校当局が編纂にあたる関係から、教育をめぐる社会状況や学校当局に関する情報に富む一方で、学生についての記述は乏しい傾向にあることを指摘し、この沿革史の傾向を補う上で同時代の学内報や同窓会報類等が有益であると述べている⁷。また永田英明氏は、大学アーカイブズにおける「実物資料」の活用においては、その

資料に関わる組織や個人の営みに関する記録の保存や、資料にまつわる人びとの記憶の「記録化」が決定的な意味をもつことを指摘している⁸。筆者も、女高師の歴史を紹介する映像資料の制作や展示に関与した際、卒業生のオーラルヒストリー・女高師の事務書類・写真やモノ資料という形態や視点が異なる史料群をリンクさせることにより、より具体的な大学の歴史を明示することが可能となることを経験した⁹。

しかしながら、学生の視点から見た大学生活の記録は、大学運営側が生成する記録群と比較し、大学には残りにくい。ゆえに、積極的な収集が行われない限り、大学史資料としての利活用がなされにくい史料群であるといえよう。

2. 女子大学卒業生のライフヒストリー記録の特徴—記録の「孤立化」—

女性の四年制大学への進学率が10%を超えるのは1973（昭和48）年のことであり、1960年代において、四年制大学に通う女性はマイノリティであった。さらに1960年から1969年の間に四年制大学に通う女子学生のうち、女子大学に在籍する学生の比率は31%から28%に推移するものの、1960年代の4年制大学に通う女子学生のうち、およそ3人に1人が女子大学に在籍していた。ゆえに1950年代から70年代の四年制女子大学生の活動を考える上で、女子大学の存在は無視できないものであると考えられる¹⁰。

しかしながら、本誌掲載のパネル報告¹¹や論文で言及されているように¹²、男女雇用機会均等法成立以前の女子大学卒業生は、男子大学生同様に大学生活を送りながらも、就職活動においては男子学生とは別個に扱われ、さらに社会に出た後も、男子大学生とは異なるライフコースをたどらざるを得なかった。さらに、同時期の女性の多数派にも属さない、ある意味で中間的な存在であった。しかしながら、彼女たちが卒業後に直面した問題、

例えば結婚・出産・介護・配偶者の転勤等のライフイベントにともない生じたキャリア形成に関わる諸問題は、現代の多くの女性が経験する問題と共通しており、女子大学の卒業生のライフストーリーを分析することは現代の社会問題を考える上で重要であると考えられる。

ところが、その分析の基盤となる女子大学の卒業生のライフストーリーを知ることが可能となる記録は三重の意味で孤立していると言える。第一に、少数者の記録であるがゆえに、大学史や女性史及び大学紛争研究等で、言及されることが少ない。第二に、前述のように女子大学の卒業生たちは男性同様に様々な分野に就労したが、結婚や出産などでキャリアが中断することが多く、定年までの就労を前提としている従来型のキャリア分析では対象になりにくい。それゆえに、彼女たちのライフストーリーが記録として残されることが少ないという状況が生じている。さらに第三として、女性史資料全体にいえることではあるが、近現代史の通史や自治体史の叙述においては、女性に関する記述は別編として切り出されることが多いという傾向がある。さらに、この「孤立化」ゆえに派生する問題として、女性関連の史資料群は受け入れ先が見つかりづらい、存在が知られていないという問題が現存しているのである¹³。

3. 女子大学卒業生のオーラルヒストリー

次に女子大学卒業生のライフストーリーの記録の例として、オーラルヒストリーを紹介したい。

折井美耶子氏によれば、1950年代から70年代にかけて、『母の歴史』、『あゝ野麦峠』、『サンダカン八番娼館』、『聞書 ひたむきな女たち』等、多様な女性たちからの聞き書きをもとにし、女性の歴史が描かれてきた。さらに1970年代後半からは地域女性史の活動も活発となり、各地で自主的な地域女性史研究会が発足し、その後、地方自治体により女性政策の一環として地域の女性史の編

纂が行われるようになった。この地域女性史の編纂においても、オーラルヒストリーが資料として用いられたという¹⁴。その理由について折井氏は、「地域女性史の編纂には、文字資料が少ない」ことを挙げ、「ごく普通に生きてきた人たちの普通の暮らしなどは記録されてこなかったわけですから、当然聞き書きを使うこと」になると述べ、女性史研究においてオーラルヒストリーが欠くことのできない資料であることを指摘している¹⁵。

また久留島典子氏は女性に関する資料を収集するアーカイブズにおけるオーラルヒストリーを「他の資料類型とは異なる性格を持つと同時に、『近代以降の女性に関する資料』を収集する女性アーカイブズにとっては、きわめて重要な資料」であると位置づけている。久留島氏はその理由について以下のように述べている。

特に文献史料は社会的地位が高い者たち、あるいは公的に位置づけられている者たちの記録という側面が強く、女性や社会的弱者に関する資料は、少ないが、オーラル・ヒストリー資料の収集は、その間隙を埋め、この手法のみによって彼女ら・彼らの歴史を残すことが可能という性格を持つからである¹⁶

これまで述べてきたように、本稿でとりあげる女子大学卒業生のライフストーリー記録は女性であること、さらに女性の中でもマイノリティであるがゆえに「記録として残されてこなかった記録」であり、「孤立化」している記録であると言える。

また、大学史資料の観点からすれば、大学には残りにくい学生による活動の記録であり、学生の視点から見た大学生活の記録である。ゆえに、女子大学卒業生のライフストーリー記録を収集・保存する手段としてオーラルヒストリーは有効かつ必要不可欠であると言えるだろう。

すでに一部の女子大学においては、卒業生の

オーラルヒストリーを大学史資料の一部として組み込んでいる事例が見られる。例えば津田塾大学は津田塾大学デジタルアーカイブにおいて卒業生のオーラルヒストリーの動画を公開している¹⁷。また、和洋女子大学は学内の総合教育研究機構のプロジェクトの一環として、卒業生のオーラルヒストリーを収集し、大学のホームページで「卒業生オーラルヒストリーアーカイブ」として文字起こしを公開している¹⁸。ホームページでは、「卒業生オーラルヒストリーアーカイブ」について「現在和洋女子大学に学ぶ女性たち、そして卒業生の方々に、そうした女性の先輩のライフヒストリーを伺うことで、励まされ、多様な人生の道筋を知って、それぞれの人の可能性をつかむために、またそれは和洋女子大学の歴史にとっても大事な宝として記録することに致しました¹⁹」と紹介している。

4. 女子大学の同窓会関連史料—卒業生による手記・回想録—

女子大学卒業生のライフヒストリー記録の第二の例として、同窓会関連史料について紹介したい。

女子大学の卒業生の多様な活動を支えたのは、同窓会や同窓意識であったことが指摘されている²⁰。ゆえに、女子大学卒業生のライフヒストリーを分析する上で、同窓会や同窓生の活動を記録した同窓会関連史料の存在は重要である。

表1は、お茶の水女子大学附属図書館に所蔵されている、女高師とお茶大の同窓会である桜蔭会や卒業生有志により発行された手記集と刊行物のリストである。お茶の水女子大学附属図書館には、桜蔭会の会報の一部も所蔵されている。この他にも、図書館に所蔵されていない、卒業生個人や桜蔭会地方支部等によって発行された女高師やお茶大における学生時代とその後の生活を回顧した手記も多数あると考えられる。

卒業生の手記が持つ歴史史料としての意義を示す事例を紹介したい。2022年に廃止となった、お茶大の学生寮であった大山寮には、1952（昭和27）年まで寮監制度という制度が存在した。寮監制度について『お茶の水女子大学百年史』には次のような記述がある。

家政科の女性教官が寮監として交代で寮に宿泊し、二十二年三月には寮監長も任命され、

表1 お茶の水女子大学附属図書館所蔵の桜蔭会・卒業生有志による刊行物

著者・編集	タイトル	発行年
東京女子高等師範学校昭和十年度文科卒業生	消息集：卒業満二十年記念	1956年
東京女高師文科昭和23年卒業生 卒業二十年記念クラス会	卒業20年記念文集： 東京女高師文科昭和23年卒業	1968年
大正十三年同校家事科卒業生 記念行事文集編集委員会	五十年の思い出： 東京女子高等師範学校卒業五十周年	1974年
桜蔭会徳島支部	三十年のあゆみ：桜蔭会徳島支部	1975年
桜蔭会岩手県支部	徽音の和：桜蔭会岩手県支部四〇年記念誌	1995年
桜蔭会岡山県支部 二十一世紀を記念する文集作成委員	湧水群：二つの世紀を生きて	2001年
桜蔭会北海道支部	徽音：東京女高師のころ	2005年
桜蔭会新潟支部	雪椿：学びの糸にむすばれて	2007年
桜蔭会東京支部	桜蔭会東京支部六十年記念誌	2007年
桜蔭会沖縄支部	お茶の水女子大学桜蔭会沖縄支部文集第一号	2008年
東京女高師・お茶の水女子大学 五〇年代を記録する会	私の女高師・私のお茶大：一九五〇年代学生運動のうねりの中で	2004年

その監督のもとで寮生が自治的に寮生活を維持していたようである²¹。

この記述からは、寮監制度の人事制度を知ることができる。しかし、『お茶の水女子大学百年史』には、寮監制度が廃止されるに至る背景である「学生が寮監制度をどのように受け止めていたか」については、寮監の寮生に対する強い責任感が学生には「私生活に対する干渉」と受け取られたとの記述があるのみとなっている²²。

一方、1950年代に大山寮に在籍した木下満子氏は、「東京女高師・お茶の水女子大学50年代を記録する会」により発行された『私の女高師・私のお茶大ー1950年代学生運動のうねりの中でー』において、寮監について次のように述べている。

夜七時、部屋の前の廊下に、全員、整列させられ、寮監先生の点呼を受ける。実質、これが門限ということになる。

そして十一時が、消灯時間。

学生時代というのは友と語り明かしたり、読みだしたら止まらず朝になっていた、なんていう生活が当たり前と思っていた私達にとって、「十一時の消灯」ほど情けない制約は我慢できるものではない。

十一時近くになると、部屋いっぱい三人のフトンを敷き、さも寝ているらしく何かを入れて高くふくらませて形を整える。そして空いた押し入れに電気スタンドを持ち込み、続きを読み、声を殺して話す²³。

この後の記述には、電源スイッチが切られてしまったため寮生が電源スイッチを入れに廊下に出たところ、寮監に見つかってしまい、ついに寮監が部屋に入ってくるという場面がある。

おしとやかな寮監先生は、決して怒鳴ったりはなさらない。見逃して頂いたものと思っ

て部屋で読んでいると、しばらくたってから入口の引き戸がコツコツとノックされ、ささやくような声で「ごめん遊ばせ」と言いつつ入ってこられた寮監先生、〔中略〕しかし言葉は忘れてしまったが、「フトンを偽装しても、どこで何をしているか、存じてますわよ」といった皮肉たっぷりだったので、恐まじりのイヤーな気分は忘れられない²⁴。

この木下氏の手記からは、寮監による「寮生に対する強い責任感」の実態とそれを寮生がどのように受け止めていたかがわかる。お茶大の学寮における寮監制度が廃止に至る過程については、『お茶の水女子大学百年史』に次のような記述がある。1952（昭和27）年6月1日に開催された寮生大会及び同年6月9日に開催された学生大会において、寮監制度の廃止が決議された。学生大会ではストライキ決議もなされたが、このストライキ決議について、『お茶の水女子大学百年史』には「明治八年以来八十年に近い歴史のうえで本学にとっては未曾有の事件」であり、学寮問題がその主な契機であったため、教授会は委員を選出して、学寮問題の根本的な検討に当たることになったとの記述がある。この委員会の決議により「学寮規程」の原案が作成され、7月24日から施行されることになり、これにより寮監制度は廃止されることになった。寮監廃止後の学寮の運営は、寮生の総意に基づく自治により行われることになり、教授会と寮生自治会との連絡調整機関として、学寮協議会が設置された²⁵。寮の自治体制について『お茶の水女子大学百年史』には次のように説明されている。

寮生は学寮自治会の規則を定め、学寮自治委員会を設け、その決議に基づいて、運営委員会が会計・炊事・厚生・文化など実際の運営に当たることとなった。こうして学寮生活は寮生の自治によって運営され、寮務委員であ

る教官が学寮協議会を通じて補導・助言に当たる体制になり、旧制時代以来の寄宿舎・寮生活に対する抜本的改革が実現した²⁶。

では「寮生の自治」とは実際にはどのようなものだったのだろうか。桜蔭会沖縄支部による文集に掲載されている、1966（昭和41）年に食物学科を卒業した喜名公子氏による手記には、以下の記述がある。

寮は門限の管理、清掃当番、電話当番、食券の販売等を寮生が行っていた。授業、バイト、サークル活動、読書や勉強というスケジュールの中で分担される役割を責任をもって果たしており、自治寮ということに誇りをもって²⁷。

この手記にある「門限の管理」については、桜蔭会新潟支部による文集に掲載されている、1960（昭和35）年に食物学科を卒業した吉村洋子氏の手記に言及がある。

学生時代には、東横ホールや新宿第一劇場や新橋演舞場にもよく行った。今でこそ歌舞伎の終演時間は午後九時前後だが、その頃は午後十時、十一時に及ぶことがよくあった。その際、ありがたかったのは自治寮・大山寮の門限システムであった。門限午後十時半（その頃の女子大寮の門限は六時頃だったと思う）、以後午後十一時半までは十円、十二時半までは二十円支払えばアルバイトの寮生が門を開けてくれたので心置きなく観劇することが出来た²⁸。

このように、大学沿革史という「大学運営側の視点による史料」と卒業生の手記という「学生の視点による史料」を有機的に連関させることにより、制度だけではなく、その運用実態が可視化さ

れ、当時の学生生活について具体的かつ多角的に理解することが可能となるのである。なお、お茶大の自治寮における生活については、本誌に掲載されている丸田孝子氏報告にも詳しく紹介されている²⁹。

おわりに

これまで述べてきたように、「大学運営側の視点による史料」・「学生の視点による史料」は大学の歴史を知る上で、相互補完関係を持つ。そして、「学生の視点による資料」のうち、文書に残らない、大学生活に関する記憶を記録化する手段・成果物として卒業生のオーラルヒストリーが重要なのである。また同窓会関連史料や卒業生による回想録も、オーラルヒストリーと同様に大学史資料としての重要な意義を持つ。これらの記録は、従来の大学史において触れられてこなかった、大学教育を受容した側から見た大学の歴史を描くことを可能とするのである。

同時に、これらに記録されたライフヒストリーは、大学教育や大学生活で得たものが卒業生によりどのように社会に還元されたかの証左ともなる³⁰。つまり、各教育機関の社会への貢献や、社会における役割は大学の行政文書や公的な資料（沿革史・広報紙等）だけでは探ることはできない。オーラルヒストリー、同窓会誌、そして回想録等から卒業生のライフヒストリーを探ることで初めて明らかになるのである。この点に関しては、本誌に掲載されている卒業生のパネル報告においても明示されている。

さらに、過去の女性の活動を知るための史資料は残りにくいという状況下で、女子大学卒業生のライフヒストリー記録は、労働関係資料や社会・地域活動資料との有機的な結節点になりうるとともに、現代女性をとりまく様々な問題の解決に向けたツールになりうると考えられる。例えば、本誌に収録されている土屋由里子氏報告には、男女

雇用機会均等法施行前後における大手企業に勤務する四年制女子大学卒の社員の労働環境や昇進の実態が可視化されている³¹。また、原容子氏報告からは、「専業主婦」が児童書専門書店の経営や図書館における活動等に携わることを通じて地域に貢献した姿を知ることが可能となる³²。

筆者はこれまで、女高師、お茶大のほか、母校である都内の女子大学の卒業生のオーラルヒストリーの収集にも関わってきた。これらのオーラルヒストリーから判明した三校の卒業生たちの共通点として、それぞれの立場・活動内容は異なっているが、卒業後も社会に目を向け、自らが大学で学んだことや大学生活で得たものを社会に還元するために、組織や地域において様々な活動を行っていたという点が挙げられる。また、オーラルヒストリーからは、社会の変革は法律、政策及び制度の成立のみでは到底生じないことや、それらの成立以前に個々の女性たちの「努力」や「経験」の積み重ねが存在していたことを実感した。ところが、肩書を持たない専業主婦や、企業の上位の管理職以外の女性職員及び非正規雇用の女性職員の活動の軌跡は、公文書や公刊物に記録されることは稀である。ゆえに彼女たちの「努力」や「経験」の可視化は困難となり、歴史上において「なかったこと」にされがちとなる。

しかしながら、女子大学卒業生のライフヒストリー記録を収集・保存することにより、彼女たちの活動・行動を可視化し、後世に語り継ぐことを可能とするのではないだろうか。

最後に女子大学卒業生のライフヒストリー記録を含む、女性史資料の公開及びその活用について提言したい。前述の通り、女子大学卒業生のライフヒストリー記録は、孤立している、孤立させられているケースが多い。同窓会関連史料は同窓生限定で配布されたり、自伝や回想録は個人出版されたりするケースも多いため、一般の書店や図書館に並ばないものが多数存在することが考えられる。よって、各大学の図書館・博物館・大学アー

カイブズによるこれらの記録の積極的な収集が望まれる。日本全国の女子大学で卒業生のライフヒストリー記録の積極的な収集が行われ、さらにはそれらがデータベース等でネットワーク化が実現できれば、女性史のみならず、様々な分野でこれらの記録が活用されるのではないだろうか。

そしてこれらの記録の活用のために、各女子大学で収集・保存されている大学の運営文書とともに、学生団体の記録、卒業生のオーラルヒストリーや回想録、同窓会関連史料等の情報を一元化するデータベースの構築を提言したい。このデータベースには、閉校した女子大学・女子短期大学が保存していた史資料も組み込むことも重要である。その前提として、各女子大学においては、大学の運営文書のみならず、卒業生のライフヒストリー記録の積極的な収集が行われることが必要不可欠であることは言うまでもない。また、卒業生の記録であるという観点から、各女子大学の同窓会との連携は記録の収集において非常に有効であると考えられる。

さらに、女子大学の卒業生のライフヒストリー記録を含む、国内に存在する女性史資料に関するデータを集約するシステムの構築が必要であろう。女性史資料の保存・公開については、女性史研究者たちから繰り返し提言されてきた³³。しかし、現在も女性史資料のデータベースは存在するものの、各機関の所蔵史資料のみを対象としたデータベースや、文献資料が中心となっている³⁴。各機関や団体が所蔵する行政・運営文書、文献資料、オーラルヒストリーなどの音声データ、写真・映像資料、モノ資料等についても横断的に検索が可能となる女性史資料のハブとなるデータベースシステムを構築することにより、女性史資料の「孤立化」を防ぐことが可能となると考えられる。さらに現状をふまえ、このデータベースの構築にあたっては、既存のメタデータを反映できるものとする、史資料の情報提供も、図書館・博物館・アーカイブズ機関・研究機関等に限定せず、常勤

の職を持たないフリーの研究者や地域団体等に広く門戸を開くことが必要だろう³⁵。これにより、既存の記録も、これから生成される記録も、散逸が防げると考えられる。

加えて、このデータベースを「アジア歴史資料センター」「ジャパンサーチ」等の総合的なデータベースと連携し利活用を促進することにより、他の分野の資料との融合や比較が容易になり、様々な分野の研究に女性史資料を組み込みやすくなるとともに、女性の存在や女性の視点が意識されることが期待できる。

多様な分野で活用できるシステムは、学術研究だけではなく、現在進行形の問題を解決するツールとなる。久留島氏は、「男女共同参画の観点からは、彼らの歴史ばかりでなく、彼女たちの歴史にも光をあてなければならないのはいうまでもなく、女性アーカイブズは、その確かな基盤となる³⁶」と述べている。女性に関する史資料の積極的な発掘・保存・公開・活用は、ジェンダー平等や多様性社会を実現するうえで、必要不可欠なのである。

注

- 1 本稿における「女子大学生」とは四年制女子大学に在籍していた学生を指す。
- 2 本論文は芹澤良子・加藤厚子との共同研究である、一般財団法人竹村和子フェミニズム基金研究助成(2020年度)による研究「ジェンダー平等と高学歴女性—1960年代から1970年代に高等教育を受けた女性のライフヒストリーをてがかりとして—」の成果及び、和田華子・加藤厚子・芹澤良子「四年制女子大学生の活動と記録—オーラルヒストリーの意義と可能性—」、日本アーカイブズ学会2022年度大会自由論題研究発表(2022年4月24日開催)を基にしたものである。
- 3 大学アーカイブズが収集の対象とする大学史資料については、寺崎昌男「大学アーカイブズ(archives)とはなにか」(『東京大学史紀要』第4号、1983年7月)及び永田英明「大学アーカイブズ資料論」(全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイブズ』、京都大学学術出版会、2005年所収)を参照のこと。なお、大学史に関する史資料群の表記は大学によ

り異なるが、本稿では「お茶の水女子大学資料室資料収集規程(1967年)」及びお茶の水女子大学歴史資料館デジタルアーカイブズ(https://www.lib.ocha.ac.jp/archives/shiryu_top.html?grid=menu、2024年1月13日閲覧)における表記をふまえ、「大学史資料」と表記する。

- 4 和田華子「大学史資料としてのオーラルヒストリー」(『お茶の水史学』第51号、2008年3月)を参照のこと。
- 5 森本祥子氏は「組織運営のための文書」を「いかなるアーカイブズも持たなければならない『核』である」としている(森本祥子「大学組織のアーカイブズ—理論の実践の提示への期待」、前掲『日本の大学アーカイブズ』所収)。
- 6 湯川文彦「大学史のなかの学生」(小林和幸編著『東京10大学の150年史』、筑摩書房、2023年所収)。
- 7 差波亜紀子「女子高等教育と年史編纂」(同前、『東京10大学の150年史』所収)。
- 8 前掲「大学アーカイブズ資料論」。
- 9 前掲「大学史資料としてのオーラルヒストリー」。
- 10 安東由則「日本における女子大学70年の変遷—組織の変化を中心に—」(『武庫川女子大学教育研究所研究レポート』第47号、2017年3月)及び本誌加藤厚子「『女子大』とは何か—女子大学をめぐる研究視角—」。
- 11 本誌仲田秀氏報告「お茶大生協と私の大学生活—学生時代～定年後の大学院 結果として大学生協—」、丸田孝子氏報告「小さなお役だちと大きな宝物」、范淑文氏報告「私にお茶大がくれたもの—留学生活が帰国後の糧に—」、土屋由里子氏報告「卒業して半世紀 いま思うこと—仕事と歌 二刀流の人生を生きて—」、原谷子氏報告「専業主婦?」は大忙し—たくさんの出会いに導かれて—」。
- 12 本誌芹澤良子「お茶の水女子大学の経験を活かす—聞き取りでつむぐ卒業生のあゆみ—」。
- 13 近年、女性史資料が直面している問題に関する報道としてYahooニュース「散逸が懸念される女性史関係資料、保存・公開の動き相次ぐ 高良留美子と加納実紀代の資料室オープン」(<https://news.yahoo.co.jp/articles/f9951b62b36c13b4bb97fc57153ce59243c13f66> 2024年1月13日閲覧)がある。また、地域女性史資料の保存問題については、折井美耶子『地域女性史への道—祖母たち・母たちの物語を紡ぐ—』(ドメス出版、2021年)、167~173頁に言及がある。
- 14 同前、144~147頁。
- 15 同前、149頁。この他、女性史研究とオーラルヒストリーの関係については、倉敷伸子「女性史研

- 究とオーラルヒストリー」(『大原社会問題研究所雑誌』588号、2007年11月)を参照のこと。
- 16 久留島典子「女性アーカイブズの役割と可能性」(『国立女性教育会館研究ジャーナル』vol.12、2008年3月)、10頁。
- 17 津田塾大学デジタルアーカイブ (<https://lib.tsuda.ac.jp/DigitalArchive/index.html>、2024年1月13日閲覧)
- 18 和洋女子大学「卒業生オーラル・ヒストリーアーカイブ」(https://www.wayo.ac.jp/visitors_general/comprehensive_research_organization/history_archive、2024年1月13日閲覧)
- 19 和洋女子大学総合研究機構のサイト (https://www.wayo.ac.jp/visitors_general/comprehensive_research_organization、2024年1月13日閲覧)
- 20 前掲「『女子大』とは何か—女子大学をめぐる研究視角—」。
- 21 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会編『お茶の水女子大学百年史』(『お茶の水女子大学百年史』発行委員会発行、1984年)、411頁。
- 22 同前、413頁。
- 23 木下満子「大山寮 一九五一～二年」(東京女高師お茶の水女子大学五〇年代を記録する会『私の女高師・私のお茶大—一九五〇年代学生運動のうねりの中で—』、2004年12月所収)、170～171頁。
- 24 前掲「大山寮 一九五一～二年」、171頁。
- 25 前掲『お茶の水女子大学百年史』、412頁～415頁。
- 26 同前、415頁。
- 27 喜名公子「お茶の水女子大学の思い出」(桜蔭会沖縄支部文集編集委員会『お茶の水女子大学桜蔭会沖縄支部文集 第一号』、2008年5月発行所収) 33頁。
- 28 吉村洋子「歌舞伎と大山寮」(桜蔭会新潟支部『雪椿—学びの糸にむすばれて—』、2007年2月発行所収) 27頁。
- 29 前掲「小さなお役だちと大きな宝物」。
- 30 大江洋代氏は女高師の卒業生のオーラルヒストリーの分析から、卒業生たちが持つ「女高師アイデンティティ」の形成過程と構造を分析するとともに、女高師が果たした社会的役割について明らかにしている(大江洋代「『女高師アイデンティティ』の構造—女子高等教育を担った戦前女性エリートの社会的使命—」、『お茶の水史学』第51号、2008年3月)。
- 31 前掲「卒業して半世紀 いま思うこと—仕事と歌 二刀流の人生を生きて—」。
- 32 前掲「専業主婦?」は大忙し—たくさんの出会いに導かれて—」。
- 33 女性史資料の保存問題の経緯については、前掲『地域女性史への道—祖母たち・母たちの物語を紡ぐ—』163～164頁を参照のこと。
- 34 日本国内に所蔵されている女性に関する史資料のデータベースとしては国立女性教育会館による「女性デジタルアーカイブシステム (https://w-archive.nwec.go.jp/il/meta_pub/G0000337warchive)」「NWEC災害復興支援女性アーカイブ (https://w-archive.nwec.go.jp/il/meta_pub/G0000337wd)」、「女性情報CASS (<https://winet2.nwec.go.jp/cass/>)」、「全国女性アーカイブ所在情報データベース (https://winet.nwec.go.jp/w-archive_japan/)」、一般財団法人女性労働協会による「女性労働アーカイブ (https://www.jaaww.or.jp/history/gazou_kensaku.php)」いずれも2024年1月13日閲覧」等がある。
- 35 女性史資料を保存・公開する場所として様々な団体に広く門戸を開いている事例として、認定NPO法人WANによる電子図書館「ミニコミ図書館 (<https://wan.or.jp/dwan>)、2024年1月13日閲覧」があげられる。「ミニコミ図書館」は日本全国の様々な女性団体のミニコミ誌をウェブサイト上で公開している。
- 36 前掲「女性アーカイブズの役割と可能性」、14頁。